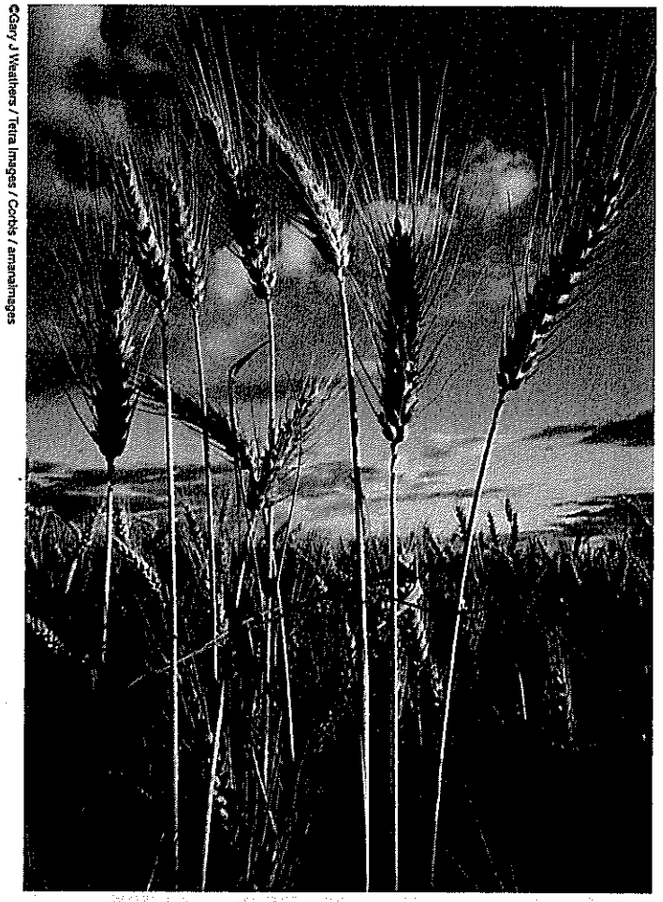

©Gary J Weathers / Tetra Images / Corbis / amanaimages

飢餓はとなりであぐらをかいている

キッチンから社会を見つめてきた
農業史研究者が警鐘を鳴らす、いまそこにある危機。

藤原辰史
text by Fujihara Tatsushi

飢餓はつねにとなりにいる。ただ、それに気づこうとしないだけだ。

日照時間の激減、気温の激変、土壌の浸食、水質汚染、干魃、紛争、噴火、洪水、震災、原発事故など、私たちの生活環境は飢餓の火種に事欠かない。これまで災害は幾度となく食料補給路を遮断し陸の孤島を生み出してきた。

あるいは、再び日本列島が大地震に見舞われたとき、幸運にも原発が爆発を免れたとしても、臨海に集中する化学工場の爆発は想定されているか。一九七六年七月イタリアで起こったセベソ農薬工場爆発事故のように、ダイオキシンの雨が日本の農地と漁場に降り注ぎ、地下水も汚染される。コメも魚も食卓から消え、水さえも飲めない。倉庫の水と食べものをめぐり日本中の人々が争い、闇市が形成され、乳幼児を抱えた親たちが街中を走り回る。一九九三年の大凶作のときのように世界中からコメをかき集め、世界の穀物価格の暴騰と、東南アジアの米作地帯の飢餓を招く。これまで一年の残飯排出量が一九〇〇万トン、一人当たり一五八キロだった日本はさらに国際的信頼を失うだろう。もちろん、穀物はすぐに政治のカードになる。食料が武器であることをどの国よりも体験したはずの日本で、「平和ボケ」という言葉の真の意味がようやく理解される。

運良くそんな大事故が起きなくても、モノカルチャーの進展が遺伝的多様性を喪失させているいま、同類のコメの品種に感染する病虫害が蔓延すれば、日本列島は同様の危機に陥るだろう。品種改良をコシヒカリ中心に進めてきたツケが回ってきた、「沈黙の秋」だと新聞は遅すぎる犯人探しに躍起になる。

そんな病虫害が発生しない幸運が当分のあいだ続くとしても、世界中で食物アレルギー患者が急増するかもしれない。二〇一三年に発表された前年度実施の文科省の統計で日本の小学生の食物アレルギーの罹患率は四・五%、中学生四・八%、高校生四・〇%に達している。二〇〇四年の同等調査がそれぞれ二・八%、二・六%、一・九%、この勢いが止まらなかったときにどう対応すべきか考えられているのか。モノカルチャーと食品の大量生産で成り立つ現代世界はアレルギーの多様化にもちろん即応できない。食物入手困難な状況のなかで、食料自給率がカロリーベースで三九%の日本では、いち早く配給制が導入されるかもしれない。

食物アレルギーの急増など人を煽って楽しむ輩の言うことですよ、という評論家の批判が幸いにも的中したとしても、想定すべきことがまだ私たちに多く残されている。世界シェア一位の農薬を体が拒絶する人が増えつづければ、無農薬の農産物の価格は高騰する。このとき、高価な有機農産物を買える層はわずかしかいない。富裕層は、有機農産物を買いだめし、警備員を雇う。世界の農家が有機農法に転換し軌道に乗るまで、貧困層から餓死者が生まれるだろう。

いや、危険な農薬は今後使わないと公言する企業や国家を信じる勇気を得られたとしても、生鮮食品の運搬時間が増え続けるいま、もはやそれに付着する菌の管理はかなり難しくなっている。少なくともアメリカは管理不能の状態だという(P・ロバーツ『食の終焉』)。O-157よりも毒性の強い菌が東京のスーパーから検出され、大量に野菜や魚介類、肉類を使った惣菜や加工食品が処分される。アジア各地から冷凍食品を輸入するが、それも価格が高騰し、外食産業は経営の危機に立たされる。

もっと現実的なシナリオは、石油危機かもしれない。石油がなければ世界の農業は崩壊する。化学肥料の生産量は激減し、冬の温室栽培、トラクター、コンバイン、乾燥機の燃料が使えなくなると、食料生産量は一気に縮小する。

日本がアメリカの戦争のために自衛隊を戦闘地域に送ったり、民間人を巻き込んだ空爆を支持したりすれば、いわゆる報復が日本国内で実行されるかもしれない。間違いなく飲食物もその標的だ。サイバーテロが原子力施設を狙えば、日本の農地も漁場も放射能で汚染される。各地のダムや水利施設に毒を混入したという脅迫状が一通公開されれば、当分日本のパニックは収まることはない。上流が毒されれば、その下流の田んぼのコメは全滅である。

これらは私の貧弱な想像力を酷使して記したリストにすぎない。危機管理の専門家なら、この程度ではすまないだろう。

とにかく、飢餓は、私たちのすぐとなりであぐらをかいている。そして、飢えは人を劇的に変えてしまう。上水道の施設から放射性ヨウ素が検出されると、人々は競って安全なミネラルウォーターを探しまわった。ましてや飢えが現実のものとなった瞬間、人はどうなるか。どんなに心優しい人でも食べものを得るために暴徒化することは、世界の歴史が証明している。

七〇年前に終わったあの戦争もまた、飢餓の戦争にほかならなかった。ナチスは、ドイツ人を飢えさせないために、ポーランドの農民を飢えさせて食料と土地を確保する「飢餓政策(フンガーポリティーク)」を断行した。日本軍は、現地調達主義に基づき、現地の農作物を収奪して飢餓をもたらすのみならず、補給の尽きた兵士たちは、東南アジアや南洋の戦場でネズミやミミズやムカデを食べ、飢え死にしていった(L・コリンガム『戦争と飢餓』)。

銃弾が体を貫き、砲弾で首が飛ぶことだけが戦死ではない。お腹が減って、身体が衰弱し、やせ細って息絶える。つまり餓死もまた戦死だったのであり、いま、あなたのとなりで機をうかがっているのである。

ふじはらたつし
京都大学人文科学研究所准教授。1976年、北海道に生まれ、島根県で育つ。京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程中途退学。博士（人間・環境学）。専門は農民史、農業思想史、農業技術史。主な著書は『カブラの冬』『ナチス・ドイツの有機農業』『稲の大東亜共栄圏　帝国日本の〈緑の革命〉』。『ナチスのキッチン　「食べること」の環境史』で第1回河合隼雄学芸賞受賞。